

教育実習で学生は何を体得したか ——最も関心を集めたことは——

田 矢 一 夫*1・金 子 博 美*2

Research After Teaching Practice in Elementary School

——What are the Students obtained and felt——

Kazuo TAYA and Hiromi KANEKO

1. はじめに

よく教育実習は医師の場合のインターンにたとえられる。教員養成では教育実習（教育実地研究ともいわれる）は極めて重要な科目の一つである。したがって教育実習については、実りある教育実習をめざして多くの研究がなされ、多数の文献が出版されている¹⁻⁶⁾。

大学という学問を修める場であって、学生が唯一実際の生きた対象から学習する科目が教育実習である。対象といい内容といい、たとえば工場実習や会社での実習とはちがった特性を持つ。後者では学生はあくまでも指導を受けるだけの立場である。一方、教育実習では、先輩の教師から指導を受けるのみでなく、子供たちを教え、指導するという立場にも立つ。実習校と実習生とのかかわりは、きわめて深く、良きにつけ悪しきにつけ学生への影響が極めて大きい所以である。実際にも教育実習後の学生たちの教師という仕事に対する考え方、教師志向の度合い、実習前と実習後の学習態度などに明らかながいが見られることが多いといわれる。これらの変化は一般によくいわれており、当然のこととして受けとめられている。

教育実習で何をするかについては、たとえば坂井⁷⁾の記述などにあるように多くのことがかかわる。実習校において学生たちは教室における授業を教師の立場で体験するのみではない。実習を通じ彼等は子ども達、それらとのふれ合い、教師相互の人間関係、学校というしくみ、学校と地域社会など多面的な体験をする。極めて少い例であるが障害児の問題にも直面する。

著者らは数年間に亘り本学教育学部初等課程の理科専修学生に、4週間の教育実習が終了した直後の週に、実習について数項目について記述を求めてきた。本報告は、これら生の情報に基づき教育実習の実態について記述したものである。

表1 教育実習事後調査の年月日と対象学生数

年 度	学生数	月 日
平成4年	27	6月29日
5年	25	6月30日
6年	37	6月30日
7年	20	7月6日
8年	30	7月4日

年度により調査日が異なるのは、年度により教育実習の終了日が異なるためである。対象とした学生は教育学部初等課程理科専修生である。

*1 たや かずお 文教大学教育学部（非常勤）

*2 かねこ ひろみ 文教大学教育学部

2. 研究方法

平成4年度から同8年度までの上記4年生に、小学校での教育実習の終了した直後の週に調査を行った。表1にそれらを示した。調査の内容は末尾に記した。学生達の自由な意見を求めるため、回答として選択肢を用意してマークをさせる方法はとらなかった。すなわち、質問に対し学生は自分の考えを自分の文章で回答する形式とした。したがって回答の内容は多様な表現でなされたが、内容的に類似するものを最大公約数的な項目に集約して整理した。その結果、質問項目とは全くちがった項目でまとめ、かつ考察を加えることとなった。表2にこれらを示した。なお、非常に興味ある個人の記述についても例をあげて引用した。

表2 回答のまとめと回答頻度数

項目	回答頻度数
教師志向の高揚	58
子ども達との関係	52
学校・教師との関係	43
授業の事前準備	42
理科授業(実験など)	39
板書について	22

本報告の特色は長期・計画的に、実習直後のホットな状態での調査の結果をまとめたものである。2~数名程度の学生に恣意的・断片的に聞く程度の情報とは異なる。

3. 結果と考察

上に記したような形での質問であったので回答者から自由な意見が多様な表現で、種々の領域についてえられた。文章表現も多様であったが、著者らはこれらの回答を以下に示す項目に集約し、これらに考察を加えた。

調査対象の学生達は、すでに3年次における授業科目「理科教育I」でクラスメート

を子ども達に見たてた模擬授業(Student Teaching, 以下S.T.と略す^{8,9)})をグループで行った経験を持つ。にもかかわらずというかやはりというか大部分の学生が大学の授業ではえられなかった実践的な、生きた勉強ができたという強いインパクトを実習から受けたとしている。

以下にインパクトの度合の多かった項目、すなわち、学生の回答にしばしば見られた内容につき多かった順に報告していく。

3.1 教師になりたいという強い意志の確立

本学教育学部の学生は教員志向者が多く、調査対象とした理科専修の学生達もこの例外ではない。実習を体験するとこの志向がより高められることがよく言われているが、実際にもこのことが調査の結果からも裏付けられた。教師になる意志を固めた、自信がついたなどを含め、教師のすばらしさを実感した、充実した4週間であったなど、多くの学生が述べている。さらに教育学部の学生としての充実感を味わったや夢のような4週間であったとした学生もいる。実習校の校長さんから「顔つきが変わったといわれた」と述べた者もいる。その他にもよい経験であったという者など、実習は生きた学習という強烈なインパクトと同様な教師志向へのインパクトを受けたようである。うわついた調子でなく教師の仕事の厳しさ、大変さ、重労働で体力を必要とすることをふまえた上での教師志向の高揚である。

逆に、やる気をなくしたという学生は非常に少なく、それなりの理由があるようである。たとえば、もともと教師を志望していないとか、実習校での指導の教師との人間関係に問題を生じたなどの学生である。

3.2 教育実習とは子ども達とのふれあいである

子どもに接する態度や学級経営の大切さな

どを体験し、実習におけるキーポイントとして子ども達との意志の疎通、信頼関係をあげている。授業のときだけでなく、学校に在る間は子ども達への配慮をおこたらぬ心構えが大切としている。

子ども達に対してほとんどの実習生がよい人間関係を持たとしている。具体的にいくつか例をあげてみる。子ども達は素直でよくなつてくれたとか研究授業では子ども達の方から励ましを受けたなど彼等のやさしさの体験の報告がある。はじめはごちなくともこちらの熱意が通じた、子どもから教わったことが多かったなどの回答もある。中にはマスクミで報じられることを確かめてみようという学生もいた。結果は、報道されているほど子どもは悪くないというものであった。実習の終わりには、別れにあたり涙しそうになったり、また実習校に行つて子ども達に会つてみたいという報告もある。

子ども達にとり実習生は多くの場合に現職者にはない若さが新鮮にうつり、実習生のひたむきさもあつて、大いに歓迎されるようである。実習校の教師もこの点をよく理解し、実習生受け入れの一つのメリットとしてあげている。

3.3 事前準備の大切さを再認識

学生の多くは、授業を行う前の準備の大切なことを大学の授業で学習し、理科の教材研究の大切なことは前述したS. T. で学習している。S. T. の準備を1週間から3週間前に行うのである。グループによっては何回も理科教育の実験室に来て事前の準備を行うものが少ない。こうして学生はS. T. においても授業のための準備が不可欠であることを体験している。にもかかわらず、本番の教育実習において、事前準備の大切さを再認識するのである。実習で教材研究などのために何回も徹夜したとの報告もある。このように万全に備えたつもりでも、予期しない事態や時間

の超過などで予定通りの授業ができなかった例は少ない。

このように事前の準備の重要性についても大学の授業での学習にはない度合で体得できるのが教育実習である。

なお、理科の授業における準備については後に述べる。

3.4 実習校での人間関係

——先生方の熱心な指導——

表現はさまざまであるが、実習生の延べ1/3以上は何等かの点で実習校における教師との関係について述べている。まず、ほとんどの実習生は、受け入れ校の教師の誠意ある指導を体験して、感謝し満足している。これは実習後に学生達の教師志向が強められる原因の一つにもなっている。著者も約100校に達する実習校との接触を通じ、ほとんどの学校が実習を重要な学校行事の一つとして位置づけている現実を体験している。各校とも校長以下、先生方が実りある実習が実現できるよう大変な努力をされている。実習生を紹介するため最初に実習校を訪れると、すでに実習プログラムや指導の教師など決定されている学校がほとんどである。その一方で、どの学年を指導してみたいかと学生の希望も聞く配慮もなされている。研究授業やその直後の研究協議会のみでなく、実習期間中を通して実習生を直接指導される先生方のご苦労は大変なものであることを、学生達の報告から知ることができる。

実習生は学校での教師相互の人間関係についても体験してくる。僅か2~3の例を除き人間関係が円滑であり、学校の運営がスムーズに進行していると述べている。4週間、早朝から夕方まで、ときには夜おそくまでの実習校での生活を通しての記述である。各学校の実状をほぼそのまま反映したものと考えられる。しかし、中には指導教師との間の意志の疎通がうまくいかず、相互の誤解を生み、

つらくあたられた悩みを訴えた学生もいた。この学生は卒業後すぐに一般の仕事について。逆に指導教師の生きざまに共鳴し、将来の自分をそれに重ねる学生もいた。ともかく、どの学年でも教師達との人間関係についての重要性がかなりの数述べられている。

なお、例外的に教育実習での学生の指導に熱心でない教師がいるとの報告(複数)もみられる。実習生は実習を通じ多様な勉強をすることを痛感させる例である。

3.5 理科の授業に関して

授業の事前準備については3.3に述べたが、理科の授業はほとんど毎回のように実験や観察を行う。準備の大切さと授業の成否の80%がこれにかかっているとする者もいる。次には安全に関しての記述が多く、受け入れ校の理科の教具などの不足がこれにつぐ。これに関連して、実習生が理科の授業に新風を吹き込んだ例もいくつかある。

プランクトンの観察：これまでその学校ではうまくいかなかったプランクトンの観察を実習生をつくった捕集ネットで成功させた。この学校では今後もこれを利用して授業ができるとの報告がある。

メダカの飼育：実習生が熱心に教室でメダカの世話をする姿に、子ども達が動かされて実習生への信頼が生じた。実習後も子ども達がメダカの飼育・観察を続けることになった。

3.6 板書について

これについては、書く位置・アレンジメント・字の大きさ・濃さなどに注意を受けたとの報告が多い。調査の回答の中でも大部分は注意された例であるが、字がきれい、適切な板書をしたとほめられた例(複数)もある。最も古くから、またきわめて一般的な方法で、かつ簡単な方法であるが、板書はチョークのみでなく、紙やプラスチック板をセロテープや磁石で黒板に固定するものもふくめて重要

なものであることが再確認される。

3.7 その他

実習が楽しかったという感想は圧倒的な学生達の意見である。ただし各学年とも辛かったとか、それに類した感想の学生も1~3名程度はいる。

実習校への希望については、特にないがこれも大多数で、表現はさまざまであるが協力に感謝する内容ということであろう。

大学に対するものとしては、どの年度も少数のものが意見を述べている。その中で平成8年度の学生は10名が3年次での実習を希望するとしている。教員採用試験の合格が年々難しくなっていること、企業志向者も増えていることなどの反映か。ただ、学生の実力の問題もあり、3年次での実習は付属学校でおこない4年次で一般の学校で実習を行っている大学もある。

授業では欠かすことのできない指導案に関しては、当然すぎるのか特に回答が集中することもなかったが、新しい学習指導要領になってから、指導案がより子どもの活動中心の内容のものが望まれている。

4. まとめ

本研究の基礎である教育実習生への調査はどの年度も調査当日の出席者のみを対象とし、ホットな情報をえることとした。学生に回答を求めた調査の内容も、とくに関心の深い事項、感銘の深いこと、できごとなどについて学生が自由に書くというものである。調査事項につきあらかじめ用意した項目の選択肢について回答を求める形式をとらなかった。その結果として回答内容の整理は複雑となった。にもかかわらず、結果にみられるように実習生が何を体得し、何に感じたかを知ることができた。すなわち、教育実習では、

1. 教師志向の高揚
2. 子ども達との関係の大切さの実感

3. 授業の事前準備の重要性の再認識
4. 実習校の教師への感謝と相互理解の大切さの認識
5. 理科の授業では実験の大切さ、少いが理科環境の不備などが実習生達の主な収穫や意見であることを確かめた。

参考文献

- 1) 日本教育大学協会第三部会編著 「教育実習の手引」 学芸図書 1952.
- 2) 鈴木慎一 「教育実習論」 南窓社 1970.
- 3) 東京学芸大学内教育実習研究会編 「教育実習・研修パッケージ—小学校編」 1979.
- 4) 東京学芸大学教育実習研究指導センター編 「教育実地研究のための課題と手引き」 1983.
- 5) 岸 光城・羽原貞夫編著 「教育実習」 教職専門シリーズ9 ミネルヴァ書房 1993.
- 6) 文教大学教育学部 「実習の手引」 文教大学 平成8年
- 7) 東京学芸大学教師教育研究会 「実践的教師入門—教育実地研究の基礎」 東洋館出版 平成7年
- 8) 田矢一夫・金子博美 初等教育教員養成課程における理科教育—理科が専門でない学生へのシラバス試案— 文教大学教育学部紀要第27集 p.52-55 平成5年
- 9) 田矢一夫・金子博美 初等教育教員養成課程における理科教育 II 文教大学教育学部紀要第28集 p.62-68 平成6年

教育実習に関する調査

教育実習を体験し、つぎの質問に文章で回答して下さい。今後の後輩達の実習の参考にしたいと思います。なお、特に記述することがない項目はパスしてよい。

1. 教育実習で何をえましたか。
2. 実習中に最も印象の深かったことは何ですか。
3. 実習中とくに注意を受けたことは何ですか。
4. 実習校に何を希望しますか。
5. 大学に何を希望しますか。
6. その他（たとえば、楽しかったこと、つらかったことなど、自由に…）

回答用紙として、本学試験解答用紙（B4版）を用い、裏側にも回答を書いてよいとした。